

# 山とスキー

第八十五號



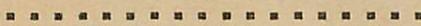
札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可  
昭和三年八月廿八日印刷納本

昭和三年九月一日發行  
(每月一回  
一日發行)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 目 號 五 十 八 第



記 事

スキーオリムピック大會行

(五〇新競技に出場して)

高 橋

昂

(一)

トナシベツ川

伊 藤 秀 五 郎

(五)

『山の呼ぶ聲』を讀んで

加 納 一 郎

(八)

日章旗アムステルダムに翻る

廣 田 生

(三)

謹 述

小 川 生

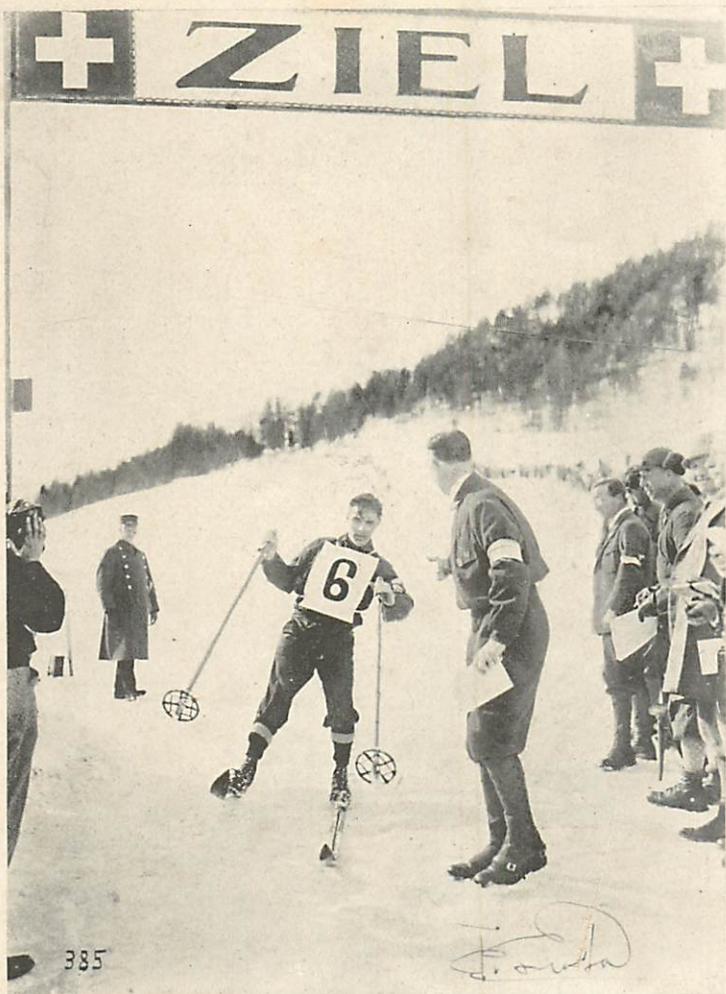
(三)

寫 眞 版

ヤンソン (五〇K・M二著)

槍 岳

昭和三年九月發行



ヤンソン (50K.M 二着)

## スキーオリムピック大會行

—五〇軒競技に出場して—

高 橋 昂

私達が第二回冬期オリムピックスキー競技に参加することになつて、器具や服装の總べてを整へ様と考へて居たベルリンの市に来て見ると、その希望がすっかり外れてしまつたのでその次の目的地はチューリッヒ市となつた。列車がライン河のみなかみさして登りつめ、視界が急に廣まると明媚なチューリッヒ湖、湖の入口を車が渡り終つた處がチューリッヒ驛で驛頭から眺めたスキス特有の色を持つた緑の湖は旅行者の氣分を心底から朗らかにしてしまつた。ホームにはもう出迎への在留邦人が先に出た連中と挨拶を交してゐる。痒いところへ手のとゞいた親切は、異國にあつて不案内の一行をするりするりと運んでくれるのが心からうしい。宿の室の割當が定ると直ぐ此の市で一番有名な運動具店のフリツチと云ふ店へ行くと、大變心持よく遇してくれたけれど、選手の希望を満足させてくれる様な器具は一つも見當らないので今まであこがれきたつた望みも淡い失望の淵におひやられてしまつた。ジャンプスキー、レース用スキー、ステツク等々と數多ある店を次から次へとあさり廻つたが一般向きのものなら大變立派なものがあるけれども、黒人向きの品なら日本品の方が遙かに優れたものが多いので列車の都合で長春に残して來たジャンプスキーが一層おしくてならない。

街を歩いて居るとスキーのポスターが異様に目につく。

例年ならば雪のあると云ふ此の町に、雪は一寸もなくて遙けき彼方の山々が残りの雪を鹿の子班にとどめて春の様なボカ／＼した日和の中をポスター、寫眞、カタログ、案内記等々とあさつて歩いてゐる中に、スキー地の人の氣分になりきつて居る。サンモリツへ一日でも早く行きたいには行きたいのだが、宿や其他の都合で四日間の滞在を餘儀なくされて、連日買物に出たり山に登つたしてゐる中に、シベリヤの二週間の汽車の疲れで、九月以來故國で鍛へた身體もベルリンの宿に入つたときは殆んど意味をなさなくなつてしまつて、宿の三階の自室へ辛らうじて昇つた位になつて居たのがすつかり回復してサンモリツ市にいた翌朝からスキーをつけて練習に出掛け得たのであつた。

此の市には *Neue Kirche, St. Pauli* と云ふ大變大きなスキー俱樂部があつて、會長はシャイデカー氏で、我々が彼を銀行に訪ねたときは極めて多忙の時であつたにも關らず心持よく面會してくれて、會するや直ぐその俱樂部の所有にかゝる *Gravens* のヒュツテに是非日本選手を案内したいとの話、旅費の少ない一行のことゝて日取の都合さへつけば願つても行つて見たいところではあつたけれど、早くサンモリツの様子を知りたかつたのと、フアルスキーを持つて居ないので甚だ残念ではあつたが遂に行きかねてしまつた。そしてその夜はクラブの總會があつて我々もその會に招待されたので三分ばかり出席して見たが、會議の席が蜂の巣をつつきつけた様などころは一寸も我々の會合とは變りないが、唯其の出席者の中の過半数が婦人であつたことは如何にも外國らしくて好ましく感ぜられた。

我々が日本を出る時には可成多くのスキーとステックを準備したのであつたが、途中鐵道輸送の關係で捨て、しまつたりしてサンモリツ市に着したときには、樺材スキー三臺、櫻材三臺半（途中一本折損のため）イタヤ材一臺 計七臺半のレース用スキーとイタヤ材フアルスキー一臺、それに早大選手特有の軽い丈夫な竹製ステック拾五組。

スキー輸送の苦心と云ふたら並天低でなかつた。一臺一臺白木綿で包み箱に入れて下の關、釜山、奉天、長春、ハルビン、滿洲里、マツエフスカヤ、モスコ、ネゴレロエ、ストルプツエ、ベルリン、チューリツヒ、サンモリツと十三回に亘つての各乗換毎の注意の繁雜と云つたら想像も出来ない位で、それだけでも確に神經衰弱に掛りさうだ。わけても長春

からは箱入は禁ぜられて白木綿のまゝで各自が乗換毎に積卸して居る姿を見たらまつたく氣の毒で眼險がおのづと熱して行く。それかと云ふて赤帽にもたのめない。重いシートケースを一度に四個も持ちあるきする。大きな力を以て軽いスキーを無難作に取扱はれては全くスキーがあぶない。こんなに苦心してもサンモリツに着して詳細に點見したときに、ステック二對スキー一臺がベシヤンコに用をなさなくなつてゐたのである。そればかりではない、不安な薄氣味悪いソビエツトを越えてストルブツエに入るとポーランドの列車はスキーの持込を許さない計りでなく、通貨をしこたま支拂させられ、ベルリンに来て見ると今度は荷が着してない、三日目になつてやつと荷を倉庫の奥に發見したものゝ引換證がなくてとれない。その次が關税と來たがオリムピック選手の證明でやつと保税倉庫に入れてもらつて、翌朝チューリッヒ驛へ直送して貰つて事なきを得たが、言葉の不自由な國でこれだけの出來事を片附けて行く皆の苦心も亦並大低でない。チューリッヒからサンモリツへ送るのにスキスの列車は各自にスキーを手荷物車に持込むのであるが、その手荷物車が前に一輛、後方に一輛と都合二輛あつて後方のは各自が持込んで無料であるが、後方のは驛夫が取扱ふので有料なのであるのを知らずに、後方へ各自で持込んでサンモリツでいざ取らうとするとおしまつたで渡さない。各自が持込んだのだから引換證は勿論ない。弱つた。その中にス井ツル兒になりきつた麻生君が來てオリムピック選手と云ふことで事なきを得たが、全く弱つたのはスキーである。スキーを持參しての汽車旅行は今後はかたくおことわり、今後の歐洲行きの選手は必ず各種のスキーを豊富に船で前々から送つておくに限る。

四人の選手で僅か七臺半のレーススキーとは心細い極みである。僅々七臺半でトレイニングは勿論のことイタリア、コルチナの學生大會、クロスターの競技大會、オリムピック競技會、ノールウエーのホルメンコーレン大會と履き續けに履いたのであつたが、設計當時にはオリムピックの五十基米と十八基米との兩種目だけに用ひて、他の競技には目もくれて居なかつたので思ひきり軽いものを作つてしまつたので豫定が根本から壞れてしまつたが、それでもこの軽いスキーを以てよくこれだけの多くの競技會によくも耐え得たもんだと我ながら感服してしまつた位で、その耐久力の偉大な點に純國

産スキーの眞價が躍如としてゐる。

コルチナではそれがしばしばノールランド製スキーかと聞かれる度毎に否日本製と得意に答ふる時、彼等の眼に驚異の輝きを見出すとき位うれしいことはない。この問答はサンモリツ市に來てからもよくくりかへされた。或る一日デスタンスの連中が練習から歸つて來ると、デルウインテルの雜誌で馴染の深いルーター氏が、ジャンプの練習の連中と一緒に宿に遊びに來たのに會して、我々のスキーを手にして製作所や本名を記帳したりして後に軽いのと薄いのとを評してペーバースキーと云ふて舌を巻いてゐた。ノールウエー製の木部のみで三疋もあるスキーばかりを見馴れた目からは半分近くしかない重さのスキーは恐らく子供のスキー位にしか見えなかつたに違ひないが、それを巧みに乗りこなすのが如何にも不思議でならないらしい。そしてこの軽いスキーが歐洲スキー界に相當なセンセーションを起したのであるが、ことにオリムピックの入場式の當日になつてどこから聞いて來のかノールウエーやスウェーデンの選手連が屢やつて來て感心して行つたのも亦奇の一つであつた。全く彈力の多い重い北歐製のアメリカンヒツコリーのスキーは日本人の体量にはふさわしくないが、それにしても今回我々が持つて行つたスキーは餘りに軽きに失してゐた様であるが、北歐選手の多くが九拾キログラムの体重を所有してゐるのに比して六拾キログラムの比であることや、その他の點から推測して長さ二米一〇、重量二疋一二・二五疋まで位のところを持つて行つてゐたならよりよい成績にあり得たと信じられるのである。

材部で一番多く用ひられて居るのはノールウエー製のアメリカンヒツコリーであつて、その次がノールランド製のバーチ材であつたが、彼等が我々のスキーを見て此の様な立派な木材が日本産であると聞いて感心してゐた。それにしてもチエリーと云ふ言葉が彼等には美しく花のこのみが浮んで來てゐるのにあの感じのよいスキーがそれであると聞いてまたそこに新なる驚奇が醸されるのも面白いことである。或るスキスの選手はイタヤ材を見て極度に推稱して居たが、實際此の土地（サンモリツ）ではバーチ材よりはヒツコリー、それよりもイタヤ材の方が良くゐるのである。伊太利のジャンプの有名な選手はスキーの滑度はワックスの問題であつて、材質には關係がないと話して居たが、私はその説には

たのではないかと考へると又そこに遠征の不利をかこさるゝのである。

オリムピックの競技では五〇基米でも十八基米でも日本選手のスキーは目立つて滑りが鈍かつた。ことにゴール手近になつてからの緩傾斜では特に目立つてゐたとして應援の人々の氣の揉めるのも無理はない。イタリー、クロスターと使用し續けて來て大事なオリムピックに臨んだ頃にはスキーの裏面もすつかりささくれだつてしまつて、滑度が著るしく低下してしまつたのであるが、その期に望んで新品を用ひたくも手にし得ない處に又も遠征の悲しみがあつたのである。それにしても當時まで歐洲スキー界を讚美し過ぎてゐて如何なる種のもでもたちどころに求め得ると過信して居たことは餘りに輕卒であつた。

日本人にはやはり日本製のスキーが最適して居るのである。我々が用ひたスキーの溝はフィンランド製スキーの溝に眞似たものであつたが、長距離競走を終つた後仔細に裏面を調べて見ると溝の部分を除いた兩側面のワックスのみが剝落して溝内のワックスは一寸もとれてゐない。この溝の中は全巾の三分の一に近い故に此のスキーは全面積の約三分の二に近い數で滑走を續けてスキーワックスの耐久力や、速度其の他に於て非常に大きい損失を招いてゐる。溝の起原が木目の方向に進行したがる悪性を補正するにあるのであるならば、製作に多くの手数を要して不利益の多い角溝は全廢して丸溝をば採用する方がよい。手入の方から見ても角溝は丸溝よりも遙かに多くの時間を要し且つ此の溝部にはワックスを用ひない用法が可成りに多いのでこのワックスの利用面積が丸の方よりも角の方が遙かに少いことになる。私はこの角溝の起原については一寸も知らないけれど、只それがフィンランド製のスキーに多く用ひられてゐることのみはよく知つて居るけれど、最近のフィンランド製のスキーは殆んどノールウェー形のもとに製作されつゝあることは、平地に發達したスキーが諸外國に適さないことを是認したからであらうと考へるが、溝だけが依然として更められてゐないことは何物かを藏してゐるに違ひない。

ビンディングは早大選手獨特のを持つたが、これと殆んど變りのないのがアルピナビンディングと云ふ名稱をもつて發賣さ

殆んど賛成出来ないが、それは一時の問題であつて長距離競技に於ての木質の選定は重大な問題であつて、特に大長距離競技の最後は木質のみで走り続けなければならないことを考へると益々輕視し難い。全く大長距離競技の勝負の分岐點は最後の拾基米にかゝつて居る様である。本年のホルメンコーレンの五十基米競走に於て四十基米まで第四位を保つて居てヘツゲ選手が其の最後の拾基米甚だ振はず決勝點に於て第十三位に入つたなどは我々の大いに研究すべき事柄である。オリムピックの五十基米競走に於ても第十位を得た獨乙オットワール選手と永田選手とは三八基米の點の通過まで大變によい接觸を保つて來たのであつたが、彼も亦ヘツゲ選手の例に入つてしまつたのではあるまいか。

麻生選手の棄權？

軍隊競技と五十基米競技の前日には各國の出場選手はゴール間近に作られたバラック小屋で体重、身長、握力、胸圍、張力、血壓、肺活量、血液、尿等々と非常に細密な検査がなされたが彼の体格、特にレントゲン撮影心臓常時狀、肺臟の常時及空氣吸入時、吐出時の形狀に於て彼のビストンの偉大さに於て醫師を驚歎せしめた程であつて、彼の精力を知るものはその棄權を疑ふところであつて、マラソンで鍛へしだけに到底我々の遠く及ぶべくもないのである。彼は此の五十基米競技にノールウエー製の二米三〇のスキーを履いて出場したのであるが、棄權の第一原因は恐らく此の重いスキー即体量に比例のとれない重いスキーを用ひた點にあるのではないかと考へられるのである。レースの前日私は彼に其の不利益を語り一日がかりで宿の三階にスキーと鉈を持込んで削り得る限りを削り取つたのである。二月十四日午前八時一五分彼はその削り取つた白木のスキーで雄々しくもハイルターの土地人の盛んな聲援に送られて行つたのであるが、一旬前のグスタットの五十基米に於て好成绩を收めて相當自信を得た彼も亦此の當日の惡雪に耐えかねて遂に三〇基米附近に於て總てを捨ててしまつたのは残念でならなかつた。彼に九分後れてスタートを切つた余が「オトツサアン」残念、動けないの悲壯な聲をフェキス谷に入ると間もない三〇基米附近に於て耳にしやうとは夢想だにしなかつた事で、その聲を聞くや否やまざ〜と昨日の會話のことが腦裡に浮んで來たのである。今一臺和製のスキーがあつたなら棄權しないでもよかつ

れて居たが金質のよいのと手際のよいだけにとり得、伊太利でもクロスターでも皆が此の簡単なビンディングで出場したが外國選手の大部分はベルゲンダールかウキツトビンディングであつて、スキス選手はアツテンフオーハービンディングを用ひ其他と云ふのは極めて少数に過ぎなかつた。ジャンプの選手はハウグビンディングが大多数で、其他としてはラングリーメンを用ひて居たのが之も極めて少数であつた。我々はスキスに來たつて早大式のビンディングではテールの極めてかたいノールウエー形のスキーのスパールには適しない不利益がまゝあつたので、五〇基も十八基米もベルゲンダールで出場したが大變好成績であつた。

ベルゲンダールビンディングは靴をいためることが甚だしいので此の點に留意して改良を加へた變種が非常に多いけれども、何れもが其の原形を脱してゐない中であつてウキツトビンディングだけは異彩を放つてゐる。このビンディングはオリムピックの十八基米競技にノールウエーの選手が用ひてゐたが、靴の破損がベルゲンダールより少ないのと、急傾斜の斜登行に比較的有効の様である。例年の日本コースの用にヘリングボーニングを用ひるところが多くてはベルゲンダールも有効とは思はれないが、それが幾分でも外國のそれに採用を眞似且ワックスの使用法が一般化したならば、ベルゲンダール、ウキツトビンディングは平地及緩傾斜の登行に於ては他の如何なるビンディングの到低追従し得ない長所を有してゐる。

オリムピック競技も間近い二月になつてから各國の選手が續々とサンモリツに見初めたが、旗の色別が難かくして中々に國名が讀出せない。黄地白黄十字、白地淡青色、青地白赤十字、赤地白十字と十字が仲々多いうちに水際立つて美しくいのがノールウエーの國旗、氣持のせいかわ知れないが何となく明るくて元氣が漲つて居る様な氣がする。宿のすぐ前がスウェデン選手の宿で玄關口に素的もない大きな國旗が掲げられて居る。毎夕の練習に出入してゐる姿を見ると何となく田舎臭い、紺のウインドジャケットをつけて紺のハンテングを被つてスキーの手入をしてゐるのを二階の窓から眺めた姿はどう見ても車屋さんと云ふ風情、オイ幾錢で走りますと聞いて見たい様な氣がする。いづれにしても車屋さん連中の身長はズバ抜けて大きい。五〇基の殊勳者へドランドなんとはその中でも純白のコール天の服で見立つてゐる。明け暮れに見下

す宿前のスロープで異様な練習で競技前日の降雪に對して初まつた、が見てゐて全く不可解、十四日の壓倒的の勝因はこの不可解の結果に違ひない。

我々が練習を終へてバード（サンモリツ市はドルフとバードよりなり日本選手の宿はバードにあり）の入口の丘にかゝるとちよいと生氣のない生白い小柄な兵隊さんが白地に淡青色十字のマークをつけてゐるのを見受けたが、彼等の杖が異様に短かいのと滑降の芳ばしくないのが目につく。それが有名なフィンランドの兵隊さんなのである。それにしても有名なラツバライネン兄弟やライビヨの一行は何處に來て居るのであらうか。ノールウエー、スエウデン、ドイツ、イタリ、スキツル、チエツコスロバキア、ポーランド、ウンガール、ルーマニア、フランスと何國の選手は皆姿を見せてくれるのに、フィンランド選手の見えないのが如何にも不思議でならない。

二月十一日吹雪の中にオリムピックの入場式がサンモリツドルフのアイスタデオンで舉行され、佛蘭西讀みのアルハベツト順で獨乙を先頭に端西を最後に二五ヶ國がそれと國旗をかざして場内を一巡したのであるが、事大黨はノールウエーに、愛國の士はスキツルに、日本は遠來の珍客として盛んな拍手に迎えられたと小島博士が評して居た。その内にあつて目立つて秩序あり堂々として居たのがスウエデンとノールウエーであつて、彼等はスキューの先端を前にしてテールを後に肩いでゐたが、休むときでも先端を下におくが決してテールを雪や土の上になたてる様なことはしない。

周到なる注意。彼等の榮光の礎はこんな細かい點にあつたのである。競技場へ行つて見るとジャンパーはランナーの時以上にテールを愛して居るに氣付く。スキューの速度は確にテールにあり、愛せよテール！

軍隊競走で強いと評せられて居たフィンランドチーム、シャモニーの大會での勝者スキスチームは極めて僅少の差で二三等を争ふてゐたのに、ノールウエーチームは堂々と月桂樹を半島の一端に持歸つてしまつた。此の競技で意外に感じたことはフィンランドのバーターがサマーデンまでの激しい山地に斷然頭角を現はしてゐたことであつて、それと反對に自他ともに許せし平地に近いサマーデンからの後半に於て辛うじて三等に入るを免れたことであつた。彼等の杖もスキューも

非常に短かい。ことに杖などは乳まであるかと思はれる位、スキーも二米を越えてはゐらない。

二月十三日は朝からよく降つて居た。瑞西にはめづらしい吹雪にさへ化して居た。折からの吹雪の中を鉋をスミスに借りに行つて来たTさんが歸つて来てひどい雪だ、今朝町長さんが明日の五〇基米のコース踏みに出掛けたきり未だ歸らないと云ふ話をして吹雪の中の苦闘を同情と賞讃を以て語りひつゝスキーの手入を終つてさて寢に就いたものゝ蒸し暑い夜でどうにも眠れないのでステームのバルブを閉め窓を全部開放してしまつたらどうやら眠つてしまつた。

明け方になつて目を覺ますと霧がたちこめて雨垂れの音さへ聞えて来る、其の瞬時の心配、いつもく／＼パウダースノーのみに對して多くの研究をし來つたものゝ狼狽!

午前三時といふのに同室の麻生君がむつくり床をけつてどこへ行つたか姿が消えた。寒暖計はプラス十度を示してゐるそこへ麻生君がひよつこりやつて来てオイ、スウエデンの連中は何だか變なランプを用ひてワツクスを塗つてゐると云ふ午前三時から彼等も全く此の暖氣に面喰つてゐるらしい。

眞夏の太陽を浴びてスキー大長距離競走と云ふ見出しが獨乙の新聞に出て居たが、雨後の悪雪に加ふるに強い太陽を受けて五十基米を走り續けた選手の努力は筆紙によくし得ない。四十二人の出場者に對して十二名の棄権者、約三割弱の棄権率を出した悲惨なレースは古今に恐らく其の例を見出し得まいと信ずる。

ベストレコード四時五二分三七秒 二等が五時〇五分三〇秒も亦選手の苦心を雄辯に物語つてゐる。

二月十四日午前八時一分稍高い聲援におぐられてフィンランド選手バーナメン出發(途中棄権)青竹の短かいのとフィンランド製スキーとバスガングの走法が特に光つて目につく。二分がボーレンの選手(十三等)三分チエコのネメキー(十一等)四分佛蘭西(棄権)五分獨乙ハンスパウエル(十二等)六分スウエデンのヤンソン(二等)次が獨乙(十六等)次がチエコ(棄権)九分テーノラツバライネン(六等)青竹とフィンランド製のスキーが目立つ。走法も元氣がよい。十二分ヘドルンド、白コールドのユニホームが目立つてゐる。總じてスウエデン選手の走法は地味で映へない。唯大股なの

に氣付く。十五分ノールウエーのキエールボトン(四等)カ一杯の根限りと云ひたい様に飛んで行く。次がライビヨ(棄權)優勝圏内が二人續いたので之も元氣で飛んで行く。此の邊の途中が見物に違ひない。ラツバライネン、ヘドルンド、ケルボーテン、ライビヨの一流どころが續いてゐるんだから。まご／＼してゐる中に二二分タケアソ日章旗の皮切りで飛び出すし、シユワイツヤバーナーと云はれる位だから瑞西人の應援はスバラしい、竹節君が出た、永田君も出た、もうおしまひ。五〇基走つて來なければ話しの相手がない。ヘツゲが永田君の後をすぐ追ひ掛け出した。五尺六寸位のガツシリした体で呼吸もつかずにあわただしく走つて居る。否飛んでゐる。彼の用杖法だけは異彩を放つてゐる。全く初めからあの元氣で最後まで通し得るかと思ふ位早い。見とれてゐる中に弟のラツバライネンが走り出した。一分おいて小生のスタート、一基米も行かない中にラツバの姿がもう見えない。二基米林を抜けたと思ふと道路、その先に牧柵が見える。どう見ても柵の下が六寸位すいて見える。先の選手連はどうしたんだらうなんて思ふて居る中に近づいてしまふて苦しまぎれに夢中で飛び越える。Nations 行きの大道を横切つて Osnabrück まで來ると後滑りが始まつた。

オットワール(十等)がそのすきに乗じてどん／＼近づいてくる。來たかと思ふとキンドラシーと笑ひながら追越して行く。それと云ふのも私が麻生君と嘗つて彼等のボントレシナーの合宿に遊びに行つたとき、小生のスキーの彼に比して短きを見たときに出た言葉であつて六尺四五寸の彼から見たなら確にキンドラシーに違ひない Ellberplana から一基半の道路は馬糞道氣障なサンモリツツ獨特の馬車が馬の頭に羽毛をつけて右往左往してゐる中を走るのは如何にも不快でたまらない。でも身体の調子がよいのでドン／＼進む。二分前のウンガールの選手を抜く。六基米―八基米間の登り、全く細い登り見慣れた特殊のスプール、ヘリングボニーングの跡を見て、直感的に竹節君スリツプを始めたなと感付く。可成り苦心をしてゐるらしい。上りつめた頂にボーレンの應援が二人居てシキリとワツクスと食物をすゝめてくれるけれど好意を謝しつゝお先へ滑降、*Ein Felsloch* まで來るとスタートで應援してくれた日本の方々がもう先に來て準備をして待つてござる。竹節君が今ミックスを塗つて出掛けたばかりだと云ふけれど仲々見當らない。

一〇基米―一五基米までの五基米は非常に險峻。この五基米間とこの附近の滑降コースが今度の五十基米コース中の難路であつた。ことにこの五基米の間は南面傾斜の地であつたためと強い直射光線をさえぎる林とては一つもなくて傾斜の急な處などは雪が一寸なくて躊躇する様な處が可成に多かつた。礫の上を走るなんてことは考へもしなかつたことだけに意外の感じがする。伊太利と、チエコのナンバーワンのデマツとドントが火の出る様な接戦を續けながら追越して行く遙か前方に竹節君が走つてゐるのを見出だす。前途は狭い岩間の滑降、曲りが多いだけに危険なこと甚だしい。この時分から氣温がまたしても高まりだしたので雪は見る／＼中に悪化して行く。

スプールも荒れ始めてきてゐる。ノールウエー形スキー特有の穴がスプールの處々に穴を掘り始めて來て階段を滑降して行く様で氣味が悪い。腰の強いスキーはスピードを出した上にこんな惡戯を残して行くんだ。比較的柔かい軽いスキーを履いて居るものゝ苦心は一通りではない。この難關を越えてしまふとこの上を横切る二基米の氷上滑走、この二基米が昨夜の雨と暖氣のため氷がゆるんで處々に湧水してゐてアイスクリームの中を走つてゐる様なもの、クリームではステックも利かないぬかるみがあつて走つてゐるまゝまご／＼してゐると落ちこんでしまふのではないかと思はれて心細い。湖水を渡り終らんとする頃左手の方向から割れるばかりの應援の聲が流れて來るので頭を回らして見るとスエデン選手を先頭に三、四人點々としてこの點を降つて行く。二三キロに對して一八キロ、その差五キロ、三〇分遅れてスタートしたことを差引いて考へると、この分でゆくと非常によいタイムだ。休憩所のある Maloja まであと一基米の地點にかゝるとフランス選手三名揃ひも揃つて遅々として進めない。追ひついて見ると全くワツクスの失敗でスキーの裏が氷づいて居て、誠にお氣の毒だ。此の邊に來ると風が一寸も當らない故か氣温は益々高まつた様な氣がする雪は益々悪い。コントロールポスト Maloja に來て見るとコルチナの大會や當地で顔馴染になつた連中が大勢ゐる。萬歳を連呼する。砂糖水、レモン、バナナ、パン等々が山積されて居る。竹節君が出て行つたばかりだ。ポーレンの選手と一緒にやつて一服の後角砂糖、レモンをポケットにして先へ。Maloja を出てからの雪質は前よりも一層甚だしく三月のザラ

メの上の新雪がとけたのと毛頭變らない。悪雪と急な二基米餘の登高とそれに續く三基米近くの滑降の苦痛は未だに經驗したこともない。カーブ等は可成りに無理の點があつたけれども途中監察員の親切から辛うじて其の困難と危険とを防いで居たに過ぎなかつた。

難關二三基米の地點を通過すると忽ち湖上へ出た。この邊りは同じ湖上でも前と一寸勝手が變つて田圃の畔を歩いてゐる様な中高い處で走りにくい。不便な所故か、人らしいものは更に見えない。面白いフェッキス谷へ全部が行つてしまつたらしい。

どよめきが遙か前方から絶えくゞに聞えて來るのは選手の通過をおもはしめる。二五基米通過、所要時間で三時間、二五基米三時間と連想してゐるのが樺太の二五米二時間十四分の自分のレコードだ。樺太の登高差と比較して約百米低いこのコースで三時間は可成に遅いタイムであるがコンデイションを斟酌して臍甲斐なきを慰めつゝ走る。

二六基米から二七基米半での一基米半に亘る潤葉樹林の登行は春の山登りを想はしめる様なところ、要所にボーレンの應援が居てヨルダーワツクスを塗つてくれたり干棗をくれたりしてくれる温情、忘れべくもあらず。こゝから五六百米を距つた急坂の頂きに廣田君を見出したときの喜び、水に渴えたときだけにレモン水を差出されたときの有難さ、その親切も忘れてブツ／＼とどなりつける競技者の我儘、それでも勵ましてくれる彼とその時の心事、競技者になりきつた者でなくては到底解し得ない温みである。

二八基米 *Yatai* (1800米) に滑降して來ると東京朝日の小高氏や傳研の小島博士が日章旗を打振つて迎えてくれるのが遠方から目につく。異郷での國旗を見たときの元氣、何かは知らないが幾万の友を得た心持す。此の頃合から疲労と空腹が特に空腹感が強まつた。が確にあると信じてゐた中憩所が見當らない。聞けば誰もがすぐ前方にあると教へてくれたばかりで行けどもくゞない。

此の過失は非常に大きな損失を招いた。空腹をかゝへて二九基から二三基まで五基米間に三百五十米の連續登行を續行

することは非常な無理であつた。此の休憩所は一才地圖を見たものは誰でもが我々と同じく早合點した様に二九と三六基米の交差點に置いてあつて入口の二九の方ではなく出口の方に設けてあつたのである。スキ一の驚威の寫眞で有名になつたフェックス谷から流れてくる小川に架した橋上を渡り終ると、右手の斜面を白装束のヘドランドが十二の番號も鮮かに極めて大きなバスガングを用ひて下つて行く。尙谷の奥の方を見ると十四五人が點々として降つて来るがその何れを見ても杖を用ひて迂るともなく走るともなく進んでくるのがどうしても不思議でならない。常には非常に速度の多いところだけに、あれまでしなければ進まないかと思はれると今まで滑降を樂みにして忍んで來た苦痛の意趣返しもどこかへ行つてしまふ。此の邊の觀衆、よくもこれ程集つたものかなと感心してしまふ。それにしても女の數がおびただしい。山の上から眺めるとコースの處だけが下に空いてゐてランナーの通過毎に觀衆がどよめいてゐる。万歳の聲もしばしばあひせかけられる。中には大日本万歳なんて御丁寧なものもあつてうれしい。三〇基米まで登つて來ると雪の中から麻生君の頭だけがひつくり出て居る。彼の不運亦同情の外、五十キロ米の勝負は一つにフェックス谷の登降で決すと云ふた人もあるだけに五基米間に一八六〇米から二二一〇米までの三五〇米の連續登行に加ふるに眞夏に等しい太陽をまもとに受けての難行苦行早い走者の時には粉雪をさへ見たと稱せられるこの谷も、日本選手の通過するときはすつかり雪も悪化しきつてゐた。Curtis 196 まで來ると今日の競技に参加しない伴、矢澤の兩君が應援してくれるけれども打合せが悪かつたので思ふ様にならない。ウンガールの選手を超越して一時はなれた竹節君に再び近接した。その先にボーレンの選手その先にも點々として居るけれども何れも悪雪にはばまれて遅々としてゐる。二〇六〇米の途中監察點を過ぎたのが一時十五分、降りにかゝつて居るのだけれども一寸も進まないで此の滑降も休めないで疲勞の種となる。この邊りのコースは札幌の三角山圓山を續けたコースにやゝ似た平易なコースであつたため當日天候ですつかり無味なもととなつてしまつて、名だたる谷の魅力もいづれかへ失せたのも残念であつた。三五基米 (Curtis 196) に來て食料にありついてやうやく満足、此の中憩點は大變地の利を得た處にあつて食料の豊富、設備の完備等々、學ぶ可き事が非常に多かつた。此の休憩所を一步踏出すと降

滑七八百米にして往路と交叉してゐるが往路の橋上に對して橋下を迂つて行く。キネマ班が盛んにカラ／＼やつてゐる。皆の話では此の邊りを通過するのの選手も生氣がなかつたらしい。永田君もオットワールとこゝまで互角でおして來たらしい。そんなことを考へると今一呼吸の踏張りがたりなかつたのが残念でならない、之も体力の差、六尺幾寸對五尺四寸、健闘亦賞すべし。こゝまで來ると交通が便利なのと地の利を得て居るので各國の應援がワツクスを持つてうよくしてゐる。私も亦皆の應援を得てワツクスを塗るには塗つたけれども急いでゐるのと疲勞とで思ふ様にノバせないのそのまゝ迂りだす。此の雪の上に腰をついたときの苦痛、若し小島博士や小高さんが國旗を手にして勵ましてくれなかつたなら國旗のかげの同胞の應援を想ひ浮べなかつたなら、恐らくレースを放棄してゐるに違ひない。

三五基米から四〇基米まで雪のよい時よい模範的なコースなんだけれど、又しても難澁の種、四〇基米から四五基米までの *Straplana* 湖に沿ふての平地滑走、滑走とは名ばかりで唯ほつ／＼歩いてゐるにすぎない。もうこゝまで來ると前を見ても後を見ても選手の姿も見えない。ときたまゼッケンを手にした選手がゴソ／＼歩いてゐるのと見物人がゴール目指して急いでゐるのが特に目立つのみ。そんな風に選手の通過がまち／＼でも觀衆は要所／＼に多數集ふて歸らうともしないでブラボーの聲援が誰彼の區別なく起つてくる。

四五基米―四六基米―四七基米の邊は毛虫の様になつて這ふてゐるに過ぎない。それにしてもこゝでの一基米の登行は連續でないけれど呼吸も満足に出來ない照りつける夕陽をあびて、顔も首も手首も眞白に鹽を吹いてヒリ／＼といったむ。四八基米ユーリアシャンツエの下まで來ると竹節君とポールン選手が走つてゐるのが影繪の如く、唯ゼッケンが揃つて夕映に輝く六時間餘の絶えざる努力は斜陽を踏んで決勝點へ。

空腹と疲勞は遂に黄昏へ導く。

眠より目覺れば先着の永田君ベットのの上に呻吟して、血壓試験をうけつゝあり。

彼も亦意氣の人。

# トナシベツ川

伊藤秀五郎

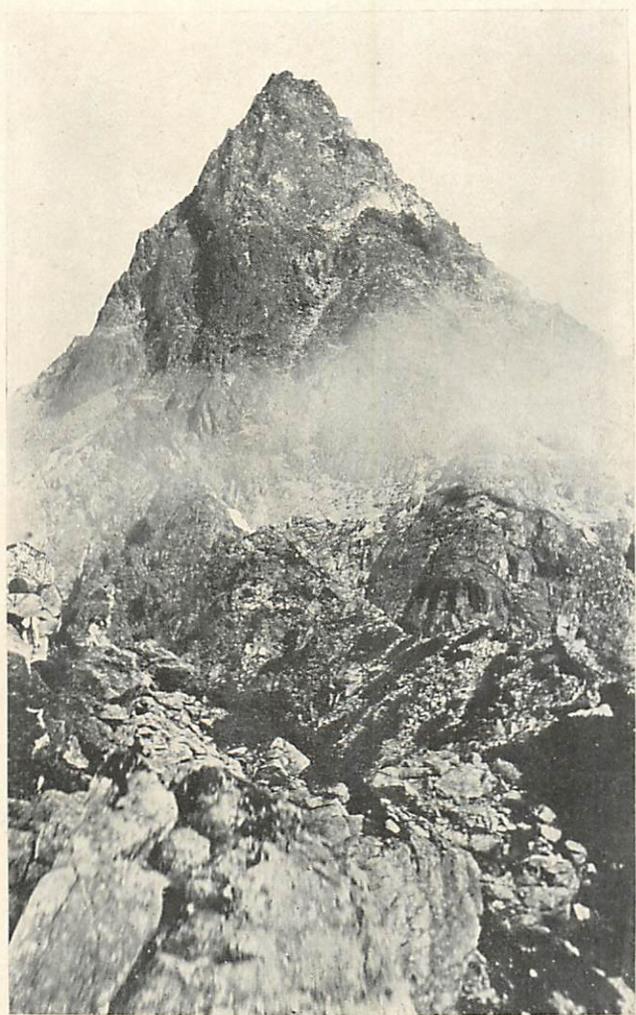
その源を、夕張岳の東面にもつてゐるトナシベツといふ川は、エバナオマンドシユベツとかポントナシベツとかラウネベツといふ様な支流を蒐めながら、然もなほ翠巒の深い溪谷の姿をもつて、幽邃な流れを金山の町まで運んでゐた。私達が、歩道もそこで盡きてゐる金山の街はづれに、最初にこの河を徒渉したのは、七月の終に近い晴れた朝も早くであつた。それは、中央高地の山を一週間程歩いた後であつたけれども、そのすがすがしい翠を映して夏を流れる冷い河の水に脚を浸してみると、また山へのあたらしい喜悅が、蒼空に空湧する雲の様に心のうちに湧き起つてくるのを私は感じた。そしていかにも山口らしい嵐氣が到るところに碧を抱いてゐる。あたりの景色に私は眼を瞠つた。滴るやうな緑の蔭には、いつも清らかな泉があつて、そこから何かしら新鮮なものがひた／＼と迫つてくるのを私は感じた。そして緑を吹いてくる夏の朝の微風は颯々と、目映ゆい日光が耀いてゐる水の上を走つて來た。私達はざぶざぶと、淺く瀬になつたところを選びながら、手に掬ひ上げてみたい程に碧い流水に膝までひたりながら、溪を深くはいつて行つた。その時は私達は、どこまでもこの河の源流を登りつめて、直接夕張岳の南方の肩にとりついて、それからまたこの峯にその源を發してゐる白金川といふのを夕張の町まで、夕張岳を越して向側に下りてみるつもりだつた。

いつたいこの夕張山脈の最高をなす夕張岳は、植物學的には餘りにも有名な山だ。高山植物の種類が多く（或は植物分布學上にも重要なところであるかもしれない）その爲にこの山は北海道ではかなり舊くから登られてゐた山である。けれ

ども、私達の興味の對照は、勿論そんなところにあつた譯ではなかつた。山の上に展開された見事な御花畑も、確かにその山の上での印象を深めることには役立たうけれども、更にさらに私達は、その浩やかな山上展望を愛するものだつた。そして私達にとつては全く未知な一つの川を、それも人家に出るまでにはかなり長い川の上流から、一つの山を越して下りて行くといふことに、一しほの興味を感じてゐたのである。だから、私達は、夕張岳へ登るにも、最も樂な登山路であるエバナオマンドシユベツは選ばずに、トナシベツの本流を最後まで廻らうと思つたのであつた。

トナシベツ川は、しかし、大きさからいふと、石狩川や十勝川に比しては、到底比較にならない程貧弱な川だ。また石狩川の上流にみる様な、河原が廣く、流水が多く、數日の天幕生活にはまことに相應しい様な、如何にも浩然の氣がそこいら中に漂つてゐる様な浩やかさももつてはゐない。といつてまた、それに因つて特色づけられる様な岩や淵や崖や瀧をもつてゐる川でもない。けれども、その平凡といへばいへる川の流れに、谷の姿に、容易に言葉に移し現すことの出来ない奥ゆかしさをもつてゐる河だ。といふよりは寧ろ、その石から石へ、瀬から瀬へ、湍から湍へ、それも傾斜の急な轟然たる音をなして流れる烈しいものではなしに、ゆつたり靜かに、ひめやかな位に落着いて、時には星の影を、時には筐のそよぎを、また時には風の光を映すその靜かな響が、私達の心に浸透し、私達の心を惹きつける或者をもつてゐるからである。所謂名勝的な風景が、案外私達の心に印象されることが淺く、かへつて何程の奇拔さももたない様な形の上では寧ろ平凡な、而も落着いた靜謐な景色の方が、より深く私達の心に觸れてくるといふことは、シラアが "Teber naive und sentimentaische Dichtung" の中でいつてゐる様に「自然の事物をわれ／＼が愛するのは、事物そのものではなくして、事物によつて現はされた想念である。」からである。

かういふ感じは、支流エバナオマンドシユベツに分れてから少し上の、所謂「箱」を越してから、二岐の附近で最初の夜の天幕を張つた時に、最もよく迫つて來たのであつた。そのかなり逼つた谷合の、滑かな蒼い石の上になつて、夕暮の流れて行く空を見上げながら、潺々として脚下を傳ふ水の流れを聴いてみると、始めて私達は、さういふ溪谷のもつ嚴かな



槍 岳

氣にぢかに斛れてゐる様な感じがした。そして「水底の岩に落つく木の葉かな」(丈草)といふやうな、不<sup>い</sup>断も一葉の落ちつく水底のやうに静寂で、何物にも觸れずに澄み透つてゐる沈潜の心境も、かゝる時にこそよく味ひ得るものでなければならなかつた。そして、そこ、愛すべき溪谷の一夜は、かくの如くもの靜かに更けていつたのであつた。

(一九二八・八・四)

附記。これは、大正十二年七月下旬、金山市街地よりトナシベツ本流を遡つて夕張岳に登り、白金川を下つて大夕張の町に出た時の紀行斷片である。その時私達の一行は人夫二人をいれて七人であつた。トナシベツ川の源流を登りつめた日は、濃密な霧のため方向を誤つて、夕張岳の南山稜へ出ることは出来ずに、東に向つて走つてゐる側稜に出で、霧の中に天幕を張つた。その翌日は幸に晴れ上つたので、そこから偃松の繁つた急斜面を夕張岳の頂に出で、鐘岩の方から白金川を下りて行つた。この川の上流は、勾配が頗る急で、大きな岩石が階段状をなしてゐて、その間を水は殆んど瀧の形をとつて流れてゐた。しかし、夕張川の本流に合すると、一時に視界が展けて來て、北海道の川に特有な、あのうねうねとまどろこしいまでに迂回する廣い川幅の、如何にも晴やかな景色になつた。そしてだん／＼下流に下りて來ると、到るところに砂金掘が小屋を掛けてゐて、その爲に川岸も荒れてゐた。もともとこの川の名も、昔白金を産した爲であるとのことだ。夕張の町に出る迄に、私達は二回天幕を張つた。この川にはひつてからは、毎日快晴で、その川歩きも實に愉快なものであつた。

# 『山の呼ぶ聲』を讀んで

加納生

これは別のところでも書いたことだが、山登りをする人は、ことに山への愛着が深ければ深いほど、筆を執りたがらない。執りたがらないにもかゝらず、事實、山に關する著作は、他のどんな趣味のそれにも増して多い。多いばかりでなく、その中には實に優れた文章が見出される。文筆商賣の人間ではとても書けない様な立派なものがある。やはり山に生き、自然に棲む心霊が自づから筆に載るためであらうか。ことに外國の有名な山岳家は同時に偉大な思想家であり、文章家であり、時には卓抜な哲學者でさへあるわれわれは多くの此等の先進の著作を通じて、山を中心にして人生、社會、自然に關する、より根本的な啓示をしぼく／＼うける。そして到底短日時は讀みこなせない。これらの名著の未讀のものうちに、どれほどの珠玉が盛られてあ

るかを思ふて、機會の乏しきを長嘆せざるを得ない。

大陸では既にかやうな多數の山岳文献の蒐集力と讀書時間、恵まれぬ人々のために総合的な書物が編まれてゐる例へば Alfred Steinizer の *Der Alpinismus in Bildern* や A. Dreyer の *Bergsteigerleben* などである。前者は世界のアルピニズムを、年代別、大陸別に系統立て、多數の寫真版を——中には稀觀に屬する繪畫の複寫をも含むで——編し、簡単な説明をなしてゐるものであり、後者は、著名な山岳家、スキー家の著作よりの拔萃短文を集めたものである。

藤木九三氏の今度の『山の呼ぶ聲』は、云はゞ上の二著を折衷したやうな形式で、兩者の短を補ふてゐる。即ち内外の優秀な山岳寫真六〇版と、ヤングハズバント、コーン

ウエー、コリー、マンマリ、ラスキン、レイ、ウイムバ  
ー、チンダル、ウエストンその他諸君御承知の有名な山岳  
家の名文二七項を選集したのであつて、譯文が原著の行間  
をも洞察した明敏、流麗なものであることは云ふまでもな  
く、印畫撰擇の苦心と鮮明な印刷、更に四六倍判の装釘で  
如何にも『山の本』らしいところに、われ／＼は十分の歡  
喜をもつ。著者は一流の登山家、ことに我が國のロックク  
ライミングのバイオニアとして『岩登り術』の著あり、  
或は秩父宮殿下が内外において試みられた山行に當つて  
常にマウンテナアとしてニュースライターとして他の追  
従を許さぬ業績を持たれる人であることは紹介するまでも  
あるまいと思ふ。ことに北海道の方々には今冬のスキー行  
で、十分の親しみを持たれたことと思ふ。この一本は山へ  
志す人々に、大なる刺戟を與へるであらうことは疑ひを容  
れない。

なほこゝに書き加へてきたいことは、先に出版せら  
れた『北大山岳部々報』である。恐らく僕はこの書の最も  
熱心な讀者の一人であつたと思ふのだが、全くそれは賞讃  
に値する多くのものをもつてゐる。山岳團體の充棟にも等

しい機關紙の中に、遅ればせに生れ出たのにもかゝらず  
その内容、体裁ともに極めて洗練されてゐることは、十分  
の誇をもつていゝだらう。伊藤秀五郎君の才能は前からひ  
そかに敬服してゐたが、こゝで讃辭を呈してをく。話が個  
人的になるが、最近五年間の北海道の山岳的進出の著しか  
つた事について、この部報を手にして、一きわ感慨深く僕  
は思ふ。そしてあの中にも書いてある通りに現在の山岳部  
——豫科の旅行部——寮の旅行部とさかのほつて、自分の  
時代を顧みて微笑、苦笑いろ／＼である。あのととき寮の會  
議で、旅行部の設立説明に當り、發起者になつてもらつた  
某君が『朝めし前に手稻山に登るのは朝めしまへだ』とい  
つて大笑ひになつたことである。

以上、氣持ちのよい二書を手にして、少し書きすぎたか  
も知れない。妄言多謝。

(七・一八)

## 日章旗アムステルダムに翻る

廣 田 生

第九回國際オリムピックも無事八月十二日、世界スポーツ史上に意義深き記録を幾多残して目出度くアムステルダム競技場に幕を閉じた。

日毎に敏捷に傳へらるゝ報導は如何に多くの我が同胞の血を湧かせたことであつたであらうか。

吾等が平和の戰士諸君の健闘遂に奏功して世界のレコードホルダー織田君、鶴田君、そして人見嬢を出したではないか。

競技の種類を持つ誇りはさること乍ら、是等世界的偉材を我が同胞に出したることは、我等日本國民の誇りであり同時に日本帝國の誇りでなくつて何であらう。

平和の戰士諸君は最も卓越せる外交を以て我が日本帝國の威信を發揚し充分なる使命を果たした人達である。

誠に今回の成果は我が日本スポーツ史上吾國史に永久に傳へらるべき價値ある業績と言ふべきではなからうか。

母國に其晴れの競技の日を待ちわびた多くの同胞は、あの當時「大會場の中央に高くうれしや日章旗翻る」。「嚴かに響く君が代の曲」「再度日章旗アムステルダムに翻る」等々の一字一句に生氣に滿ち溢れたる報導を得て、その日その頃の有様を想ふて如何に感激に燃えたことであらう。ましてや其壯絶なる競技を目撃し、嚴肅なシーンに接した多くの同胞の心事や察するに餘りあるものである。

再び私は此處に殊勳者織田君、鶴田君、人見嬢達の功績に對し滿腔の感謝を捧ぐるものである。

## 謹 述

小 川 生

本年二月秩父宮殿下には畏れ多くも雪の北海道に成らせられ、北大スキー部員の競技會を親しく御臺覽遊ばされ、つゞいて手稻山、奥手稻、朝里嶽、チセヌブリ、ニセコアンスブリの諸山岳をスキーにて御踏破遊ばされ、いやが上にもスポーツの宮様の御名を御發揚遊ばされた事は吾々の記憶に新などころであるが、當時殿下にはスキー地として恵まれたる北海道の、其設備のなほ不完全なるに御留意遊ばされ特にシャンツエ、ヒユツテの建設に對しては大野スキー部長其他に對し種々御下問あり、大野部長の多年の計畫である定山溪を中心に手稻山を振出しとして白井岳、朝里岳つゞいて余市、無意根尻、喜茂別岳から中山峠を越え狭薄山、札幌岳、空沼、惠庭を経て支笏湖に至る環狀の山脈

はその適所々にスキー小屋を作るなら其小屋づたひに一週間位のスキーツールをやるには申分なき所である事を言上し其理想の下に手稻にバラゲイスヒユツテを次にグブラー、ヒンデル兩氏が奥手稻にヘルベチアヒユツテを作つたものなる事を合せて言上したるところ殿下には畏れ多くも其計畫に非常に御賛意あらせられ、それでは自分も一つ作り度いが御自分はこのツールの反對の側からつまり支笏湖の方に作り度いとお言葉を賜はつた爲め、大野部長は其御下命によりヘルベチアヒユツテの建設者山崎、グブラーヒンデル氏をはじめとして北海道山岳會、帝室林野局札幌支局などと相計り、場所の選定其他のプランにとりかゝつてゐたところ、七月末突然宮家から「その後ヒユツテの方

はどうかつたゞらう」との畏き御問合あり大野部長は恐懼して急遽設計等を取りまとめ宮家に伺候申上げ、殿下に拜謁仰せつけられプランにつき詳細言上したところ、廿五日夜には早くも宮家より建設決定の電報あり、更に廿八日には工事一切を北大に依頼する旨の書面あり、御手許金を直接北大へ下賜さるゝ事になつた。

其御下命により建設さるゝヒユツテは我々の先輩に初めてスキーを紹介された恩師コラー先生の義兄であつて、さきにバラダイスヒユツテ並にヘルベチアヒユツテの設計者であるマックス・ヒンデル氏の設計になるもので、純スキーツル式二階建丸太作りのもので横廿四尺縦廿五尺階下にはシングルベット二個、ダブルベット二個、炊事場、スキ―置場其他薪炭貯蔵所、便所、階上は全部寢室居間となり優に卅名を收容する事が出来るものである。そして場所は空沼岳（千二百五十一米）の附近の方計沼のほとりで、空沼岳を目上に仰ぎタンネに囲まれた幽邃の地で、それに支笏、中山、定山溪等への聯絡も便利なる所で、スキー地として理想的の場所である。

## お断り

毎年本誌は七月號より改頁して第一頁として一年分を追頁にして居りました處、つひ今年第七月號に之を失念致しました故本月號より七、八兩月號に溯つて通頁數をも附しました故御了承下さい。

尙第七年目録は來月號に附録として附します故之も御了承下さい。

（編輯者）

岡村源太郎遺稿集

# スキーデイスタンスレース

完 成

限定五〇〇部

体 裁 菊版 三三〇頁 假製綴

紙 質 上質紙 寫眞版六葉

實 價 金 貳圓

發 兌 札幌 山とスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稲穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山とスキーの會



SKI HEIL

スキー  
ト

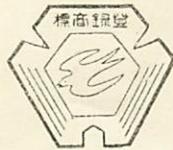
其用與全般

中野商店

スキー即ハバ

第一  
級  
數  
大  
斯

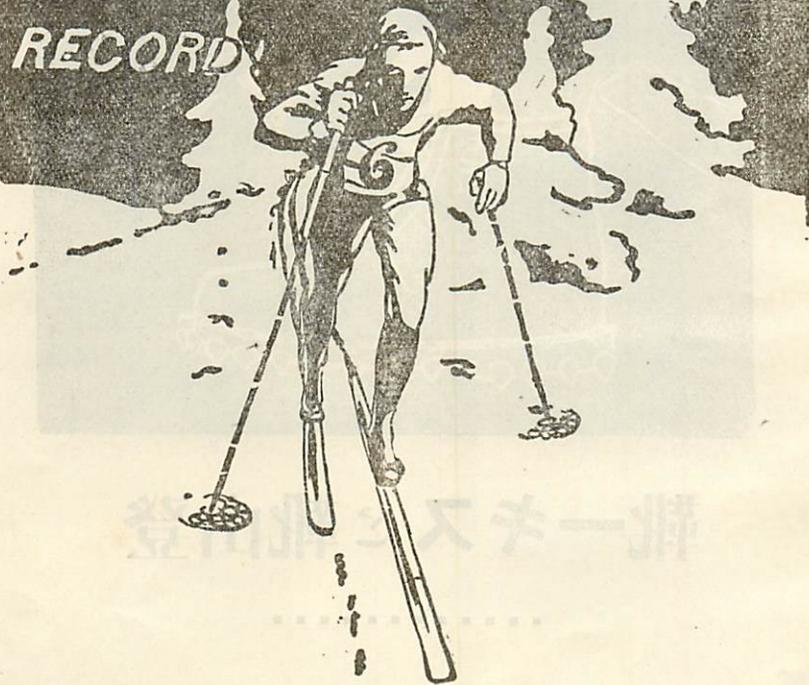
札幌



圖付感大須登

山  
ノ  
ス  
キ  
ー  
の  
會

GET SUPERFINE SKEES.  
 AND MAKE AN  
 EXCELLENT  
 RECORD!

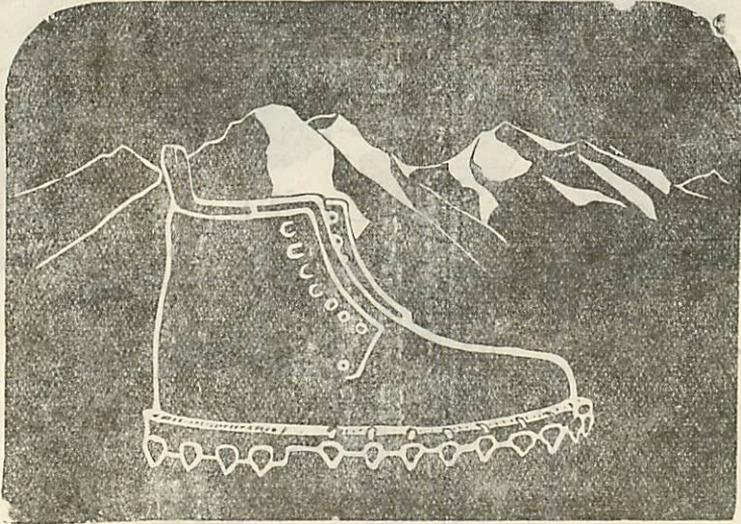


東京市本町區西下町  
 具用其ト一キスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅

第二回畜産工藝博覽會於  
一等賞金牌受領



# 登山靴とスキ一靴

.....

東京市本郷區四丁目角

## 太田屋靴店

電話小石川四七一  
番七二一六 東京替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いし、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

### 定 價 金參拾錢

\*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

\*御送金はなるべく振替にてお願致します。

\*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

\*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

\*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は

頂きます。

昭和三年八月廿八日印刷

昭和三年九月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

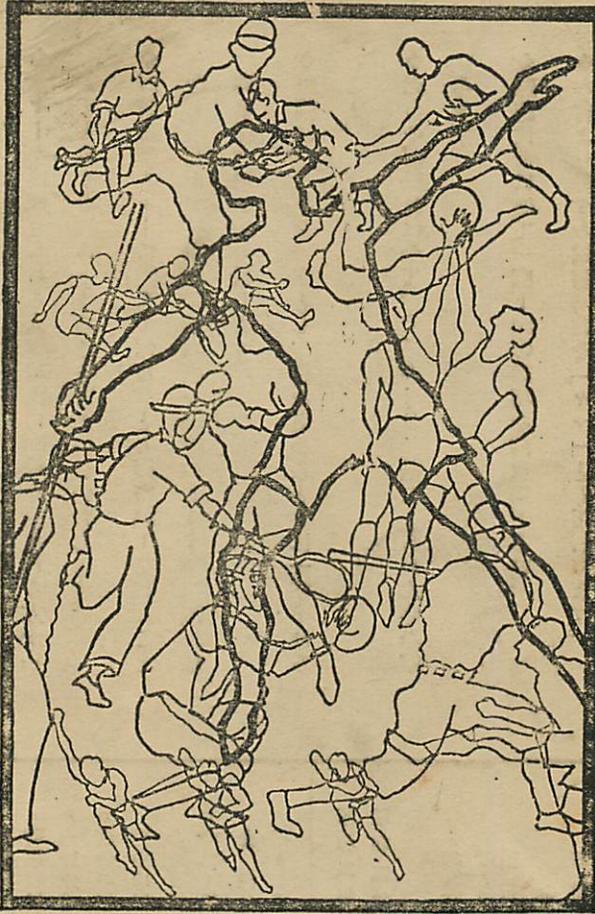
發行所 山とスキーの會

振替小樽八四九五番

振替小樽八四九五番

La Gazeto  
 de la  
 Monta kaj Skia Clubo  
 No. 85. Septembro. 1928. Sapporo. Japanujo.

大正五年七月二十七日第三種郵便物認可  
 昭和三年八月二十八日印刷納本  
 昭和三年九月一日發行



山とスキー

第八十五號

定價金參拾錢

美滿津特製

“春より夏へ”の運動具!

合名會社 美滿津商店 東京・本郷  
 赤門前

電話(小石川) 八四五・二〇七一